

どろ

秋山達子



狭い田舎道をバスが道幅一杯に走って行く。昨夜降った雨のせい、空が抜けるように青く、澄みきって、鯉のぼりが幾つか、ところどころの農家の屋根にひるがえて、気持のよい朝だった。ふと道端の溝の中に女の子が一人、うずくまって、一生懸命になにかやっているのがみえた。あの子、何をやっているのかな、あんなに道の傍でバスが通るのに危ないな。彼女はどろの中にべったりと坐りこんでしまって、どろこねとおだんご作りに夢中だった。バスがその溝とすれすれに走りさった時も、彼女は顔もあげないで、どろだらけになりながら、せっせとどろのおだんごを作って、溝のふちに並べていた。私はふと、子どもの頃、同じように雨あがりの日に、どろだらけになって、水たまりをかきまわし、ぬるぬるしたどろの感触を楽しみながら遊んだことを思い出した。それから、どろのごはんやお魚を作って、おままごとをしたことも。その後で、頭

からどろだらけになって、いつも母親にしかれたことも……。忙しい毎日の中で、めったに思いだすこともない、子ども時代の記憶のこまである。

情緒障害児とよばれる子どもたち、彼らに水彩えのぐを渡して、絵を描いてもらうと、たいていの子が、いろんな色をませあわせて、画用紙をどろどろの茶色に塗りたくってしまふ。他の子どもたちは、ちゃんと赤や青を塗りわけて、きれいに小花や小鳥を描くのに、どうしてこの子たちは、形にならないどす黒い絵になってしまうのだろうか。一人の子はえのぐにえのぐを塗り重ねて、とうとうだらだらとまわりに流れだした画用紙を二つに折ってもちあげて、こぼれおちるどろのようなえのぐをみながら、「怪物の血だぁ」と叫ぶ。それから、画用紙を踏んで、踏んで、踏みつぶし、やっと安心したように、また新しい紙にむかって、もう一度、えのぐのどろこね作業をはじめ。色鉛筆

ヤクレヨンの時は、他の子たちよりも、ずっと几帳面な、四角や線を描くのに、どうして水彩になると、こんなにとろとろにしてしまうのだろうか。きっとこの子は絵を描いているのではないのだ。えのぐをまぜること、どろのような色や、べとべとした感じと遊んでいるのだ。そしてこの子にとつて、それが、なんとなく薄気味悪く、そのくせ楽しくて、どうしてもやめられないのだ。どろのもつ魅力、どこか暖かく、柔らかい感触、それは子どもばかりではない。おとなの我々にも、懐かしく思いたされるものである。

どろの魅力はどこからくるのだろうか。インドの神話では、この世界はどろのような乳海を泳ぐ亀の背に支えられているという。日本の神話でも、どろどろの海から国造りが始まったという。キリスト教の伝統では、混沌は空を覆う雲であらわされるが、東洋では混沌は泥土である。そしてその泥土の中から、子どものおだんご作りのような創世の神話が生まれる。溝の中で一生懸命におだんご作りをしていたあの女の子は、この世界を、そして、月や、星や、太陽の輝くこの宇宙を作りだそうとしていたのだろうか。それとも、混沌とした無意識の大海から芽生える小さな自分自身を、作りあげようとしていたのだろうか。もちろん

ん、子ども自身が、あれこれと意識しておだんご作りをしていたわけではない。ただ、おとながいろいろと理由をつけて考えてみるとすれば、そこに創世の秘密が感じられるように思う。いずれにしろ、あの女の子が、なにか大きなみえざる力によって、動かされてでもいたかのように、おだんごを作っていた姿は印象的であった。

混沌には竜が住むという。西洋の竜は、迷妄の暗雲の中から舞い降りてくるが、東洋の竜は、泥土の中から舞い昇る。中国古典の中でも、占いとかがわりがあるのでよく知られている易経の最初におかれた卦は「乾」とよばれて、天の象徴であるが、そこでは竜が泥土の中から次第にあらわれて、天に昇る姿が詳しく描写されている。そして最後に、どろの中からは美しい蓮の花が咲く。

どろの中には竜のような怪物も住むし、聖なる花の種もひそんでいる。どろに親しむことによって、子どもたちはすこやかに成長する。どろを知らない都会の子たちはかわいそうだ。せめて、幼稚園や公園のお砂場で、大いにおだんご作りに精をだしてほしいと思う。

(大正大学)